

# 振動魔

海野十三

青空文庫



僕はこれから先<sup>ま</sup>ず、友人柿<sup>かき</sup>丘<sup>おか</sup>秋<sup>あき</sup>郎<sup>ろう</sup>が企てた世にも奇怪きわまる実験について述べようと思う。

柿丘秋郎と云つたのでは、読者は一向興味を覚えなだらうと思うが、これは無論、僕が仮りにつけた変名であつて、もしもその本名を此処に真<sup>ま</sup>正<sup>しやう</sup>直<sup>じき</sup>に書きたてるならば、それが余りにも有名な人物なので、読者は吓<sup>あ</sup>ツと驚いてしまふだらう。それにも拘<sup>か</sup>わらず、敢えてジャーナリズムに背<sup>そむ</sup>き、彼の本名を曝<sup>ばく</sup>露<sup>ろく</sup>しない理由は——と書きかけたものの、僕は内心それに言<sup>げん</sup>及<sup>き</sup>するに多大の躊<sup>ちゆう</sup>躇<sup>ちよ</sup>を感じていることを告白せねばならない——彼の本名を曝<sup>ばく</sup>露<sup>ろく</sup>しない其の理由は、彼の妻君である柿<sup>かき</sup>丘<sup>おか</sup>呉<sup>くれ</sup>子<sup>こ</sup>を、此後に於ても出来得るかぎり苦しめたくないからなのである。呉子さんは野獸的な今の世に、まことに珍らしいデリケートな女性である。それをちよつと比<sup>た</sup>喩<sup>と</sup>えてみるなれば、柔い黄色の羽根がやつと生えそろつたばかりのカナリヤの雛<sup>ひな</sup>仔<sup>な</sup>を、ソツと吾<sup>わ</sup>が掌<sup>て</sup>のうちに握つたような氣持、と

でも云つたなら、仄かに呉子さんから受ける感じを伝えることができるように思われる。庭の桐の木の葉崩れから、カサコソと捲きおこる秋風が呉子さんの襟脚にナヨナヨと生え並ぶ生毛を吹き倒しても、また釣瓶落ちに墜ちるといふ熟柿のように真赤な夕陽が長い睫をもつた円らな彼女の双の眼を射当てても、呉子さんの姿は、たちどころに一抔の水蒸気と化して中空に消えゆきそうに考えられるのだった。ああ僕は、あだしごとを述べるについて思わず熱心でありすぎたようだ。

このような楚々たる麗人を、妻と呼んで、来る日来る夜を紅圍に擁することの許された吾が友人柿丘秋郎こそは、世の中で一番不足のない果報者中の果報者だと云わなければならぬのだった。若し僕が、仮りに柿丘秋郎の地位を与えられていたとしたら——おお、そう妄想したばかりでも、なんと甘い刺戟に誘われることか——僕は呉子さんのために、エジプト風の宮殿を建て、珠玉を鏤めた翡翠色の王座に招じ、若し男性用の貞操帯というものがあつたなら、僕は自らそれを締めてその鍵を、呉子女王の胸に懸け、常は淡紅色の垂幕を距てて遙かに三拜九拜し、奴隷の如くに仕えることも決して厭わないであろう。しかしながら友人柿丘秋郎の場合にあつては、なんというその身識らずの貪慾者であろう。彼は、もう一人の牝豚夫人という痴れものと、切るに切

られぬ醜關係を生じてしまったのだった。

その牝豚夫人は、白石雪子と云つて、柿丘よりも二つ歳上の三十七歳だった。だが、その外貌に、それと肯く分別臭さはあつても、凡そ彼女の肉体の上には、どこにもそのように多い数字に相応わしいところが見当らなかつたのだった。とりわけ、頸筋から胸へかけての曲線は、世にもあでやかなスロープをなし、その二の腕といわず下肢といわず、牛乳をたつぷり含ませたかのように色は白くムチムチと肥え、もし一本の指でその辺を軽く押したとすると、最初は軟い餅でも突いたかのようにグツと凹みができるが、臆てその指尖の下の方から揉みほぐすような挑んでくるような、なんとも云えない怪しい弾力が働きかけてくるのだった。それにまだ一度も子供を産んだことのない牝豚夫人は、この数年来生理的な關係か、きめの細かい皮膚の下に更に蒼白い脂肪層の何ミリかを増したようだった。夫人が急に顔を近付けると、彼女のふくよかな乳房と真赤な襦袢との狭い隙間から、ムツと咽ぶような官能的な香氣が、たち昇つてくるのだった。

柿丘秋郎が、こんな妖花に係るようになったのは、彼の不運ともいうべきだろう。柿丘でなくとも、どのような男だつて、雪子夫人のような女に出遭うと、立ち竦みでもしたかのように彼女から遠のくことが出来なくなるだろう。だが柿丘秋郎を永らく、雪子夫人の

肉体への衝動を起させることなしに救つていたものは、実に柿丘秋郎にとって彼女は、恩人の令夫人だったからである。

僕は柿丘秋郎の奇怪な実験について述べると云つて置きながら、あまりに永い前置きをするのを、読者はおどかしく思われるかも知れないが、実はこれから述べるところの、一見平凡な事実が、後に至つて此の僕の手記の一番大事な部分をなすものなのであるからして、そのお心算つもりで御読みねがいたい。

さて、柿丘秋郎が恩人とあがめるといふ、いわゆる牝豚めぶた夫人の夫君は、医学博士白石しろいし右策うさく氏だった。白石博士は、湘南しょうなんに大きいサナトリウム療院を持つ有名な呼吸器病の大家だった。一般にサナトリウム療院といへば、極く軽症けいしょうの肺病患者ばかりに入院を許し、第二期とか第三期とかに入つたやや重症の患者に対しては、この療法が適しないという巧みな口実を設けて、体ていよく医者の方で逃げるのだった。だが吾が白石博士の場合にかぎり、どんな重症の患者も喜んで入院を許したばかりではなく、博士独得の病巢びょうそう固化法ごうかほうによつて、かなり高率の回復成績をあげていたのだつた。それは世間によく知られているカルシウム粉末を患者の鼻の孔から吸入させて、病巢に石灰壁せっかいへきを作る方法と些いささか似ているが、白石博士の固化法では、病巢の第一層を、或る有機物から成る新発明の

材料でもつて、強靱きょうじんでしかも可撓かとうな密着壁膜みつちやくへきまくをつくり、その上に第二層として更に黄金おうごんの粉末をもつて鍍金とくごんし、病菌の活躍を封鎖したのだった。

この白石博士を、柿丘秋郎は恩人と仰いでいると、茲こゝに誌したが、柿丘も実は博士のこの新療法によつて、更生の幸福を掴つかんだ一人だった。そして柿丘が、もう一ヶ月遅く、博士の病院の門をくぐるか、乃至なほはもう一ヶ月速く博士の診断を仰あいだとしたら、彼は更生こうせいの機会を遂に永遠に喪つたことだろう。それと云うのが、博士がこの新療法に確信を得たばかりのところへ柿丘は馳けつけたことになり、いわば博士の公式な第一試術患者となつたわけで、また一面において柿丘の病状は第三期に近く右肺の第一葉をすっかり蝕むしばまれ、その下部にある第二葉の半分ばかりを結核菌に喰くいあらざれているところだったので、若もしもう一と月、博士の門をくぐるのが遅かつたとすると、流星さすの博士もその回かいしゆ春はるについて責任がもてなかつたのだった。

ここに一寸だけ、柿丘秋郎の輪廓りんかくを読者に示さねばならぬ羽目になつたけれど、柿丘秋郎は彼の郷里おかやまの岡山おかやまに、親譲りの莫大ばくだいな資産をもち、彼の社会的名声は、社会教育家として、はたまた宗教家として、年少ながら錚々そうそうたるものがあり、殊ことに青年男女間に於ては、湧きかえるような人気がある人物だった。ちやうど病気に倒れる直前には、その

宗教団体の選挙があつて、彼は猛然なる運動の結果、その弱年にも拘らず、非常に重要な地位に就いた。凡そ宗教家とか社会教育家というものほど、奇怪な存在は無いのであつて、彼等のうちで、真に神に仕え世の罪人を救うがためにおのれの一命をも喜んで犠牲にしようという人物は、たいへん稀であつて、彼等の多くは、たまたま職業を其処にみいだしたのであつて、それから後は無論のこと職業意識をもつて説教をし、燃えるような野心をもつて上役の後釜を覗み、妙齡の婦女子の懺悔を聴き病氣見舞と称する慰撫をころみて、心中ひそかに怪しげなる情念に酔いしれるのを喜んだ。柿丘秋郎の正体もつきつめて見れば、此の種の人物だったが、割合に小胆者の彼は、幸運にも今までに襤褸をださずにやってきたのだ。これは僕が妬みごころから云うのではない。

柿丘が、あの病氣に罹つてその儘呼吸をひきとつてしまつたら、彼の競争者は、たちまち飢えたる虎狼のごとくに飛びかかつて、柿丘の地位も財産ものこらず平げてしまい、その上に不名誉な背任のかずかずまで、有ること無いことを彼の屍の上に積みかさねたことだつたらう。柿丘秋郎は、その間の雰囲気を、十二分に知っていた。

(もうこれは駄目だ。最後の覚悟をしよう)とまで、決心した彼だった。そのような危機を、白石右策博士は見事にすくつたのだつた。柿丘にしてみれば、博士に救われたのは、



病氣ばかりではなく、彼の社会的地位も、彼の家庭も、彼の財産も、ことごとく博士の手によつて同時に救われたことになるのだつた。博士のサナトリウム療院から退院するといふ日、柿丘は博士の足許にひれふして、漣然たる泪のうちに、しばらくは面をあげる事ができないほどだつた。

柿丘秋郎と白石博士との両家庭が、非常に親しい交際をするようになったのは、実にこうした事情に端を發していた。

## 2

この二組の夫婦は、しばしば一緒になつてお茶の会をしたり、その頃流行り出したばかりの麻雀を四人で打つたり、日曜日の午後などには三浦三崎の方面へドライヴしてはゴルフに興じたり、よその見る眼も睦ましい四人連れだつた。しかしながら、博士と雪子夫人と、柿丘と呉子さんとの関係は、いつまでもそう単純ではあり得なかつた。

そのことを始めて僕が知つたのは、或る夏の終り近い一日だった。雪子夫人には、博士との間にどういふものかこたね子種がなかつた。それで多量の閑暇かんかをもてあましたらしい夫人は、間もなく健康を恢かいふく復して更生こうせいの勢いものすごく社会の第一線にのりだして行つた柿丘秋郎の關係している各種の社会事業に自らすすんで、世話役をひきうけたのだった。その夏は、海岸林間学校が相模湾さがみわんの、とある海浜かいびんにひらかれていたので、柿丘夫妻は共にその土地に仮泊かほくして、子供たちの面倒をみていた。一方雪子夫人は、東京の郊外を巡回する夏期講習会の幹事として、毎日のように、早朝から、郊外と云つても決して涼しくはない会場に向いては、なにくれと世話をやっていたのだった。

そこで僕自身のことを鳥渡ちよつとお話しして置かねばならないが、僕は元來、柿丘と郷里の中学を一緒にとおりすぎてきた、いわゆる竹馬ちくばの友ともというやつで、僕は一向金もなく名声もない一個の私立中学の物理教師にすぎなかつたのであるが、幼馴染というものはまことに妙なもので、身分地位のまるつきり違つた今日でも真の兄弟のように呼びかけたり、吾わがま儘まを云いあうことができるのだった。僕は、この有名なる富める友人のお蔭で、その邸やしきに出入しては、自分の財布に相談してはいつになつても得られないような御馳走にありついたり、遇たまには独り身の鬱うつ血けつを払うために、町はずれの安待合やすまちあいの格子こうしをくぐるに足る

お小遣を彼からせしめたこともあった。彼が呉子さんを迎えてからは、そう大ぴらには、せびることもできなかつたが、彼の代りに出版の代作をしたり、講演の筋を書いたりして、その都度、学校から貰う給料に匹敵するほどの金を貰っていた。呉子さんはこの辺の事情を、うすうす知つてはいたのであるが、生れつきの善良なる心で、僕をいろいろと手厚く歓待してくれたのだつた。

僕は、柿丘邸の門をくぐるときには、案内を乞わずに、黙つて入りこむのが慣例になつていた。柿丘が呉子さんを迎えてからは、この不作法極まる訪問様式を、厳格に改めたと思つたのではあるが、どうも習慣というのは恐ろしいもので、格子にちよいと手がかかると、僕はいつの間にかやらガラガラとやつてしまつて、氣のついたときには、茶の間の座蒲団の上にチヨコナンと胡坐をかいていてという有様だつた。しかし僕は、柿丘邸の玄関と茶の間と台所と彼の書齋と、僕が泊るときにはいつも寢床をとつてもらふことになつてゐる離座敷との外には、立ち入らぬ様にきめていた。しかし、たつた一度、眼も醒めるような紅模様べにもようのフカフカする寢室の並んだ夫妻のベッド・ルームを真昼まっぴるのことだから誰も居ないだろうと思つて覗きに行き、しかも失敗したことはあるが、まアそのような話は、しない方がいいだろう。

さて、その夏の或る日のことだった。

僕は講習会で、つまらぬ講義をすませてから（その講習会に、例の牝豚夫人が参加していたことは言うまでもない）、その夜のうちに、一寸読んで置きたい本があったので、その本が柿丘の書棚しよだなにあることを兼ねて眼をつけておいたものだから、今日は行って借りてこようと思い、麻布本村町あざふほんむらちようにある彼の柿丘邸に足を向けたのだった。

玄関をガラリと開けると、僕はいつも履物はきものを見る習慣があった。並んでいる履物の種類によつて、在宅中の顔触れかおぶも知れ、その上に履物の主の機嫌がよいか、それとも険悪けんあくかぐらいの判断がつくのであった。その日の玄関には、一足の履物も並んで居なかつた。では、おん大始めたい夫人まで、まだ海辺かいへんから帰っていないのだなと思つたことだった。

それなら、ソツと上りこんで、茶の間で昼寝をしているかも知れない留守女中のお芳よしを吃驚びっくりさせてやろうと思つて、登音あしおとを盗ませて入つていったのだった。ところが茶の間にはお芳の姿が見えなかつたばかりか、勝手元までがピツシヤリ締めてあり、座蒲団の位置もキッチンと整頓ちようじかんしていて、シャローック・ホームズならずとも、お芳は相当長時間の予定で外出したらしいことがわかつた。だが、それにしては、何という不用心ふようじんなことだ。現に僕という泥棒がマンマと忍びいつたではないか。

だが、このときだった。ボソボソいう声はどこからともなく聴えたように思った。耳のせいかしらと、疑いながら、じつと耳を澄ませていると、いやそれは空耳そらみみではなかった。たしかに人声がするのだ。しかもそれは此の家の中から洩れ出でる話声だった。

柿丘夫妻はもう帰っていたのだったか。僕は立ちあがるとその声のする方へ、二三歩踏みだしたのだったが、およそ人間が、こういう機会にぶつかることがあったなら、十人が十人（悪いこととは知りながら）と言訳いいわけを吾れと吾が心に試みながら、そつと他人の秘密を盗みぎきするものなのである。僕の場合に於ても、たちまち全身を好奇心にほてらせながら、小さい冒険の第一行動をおこしたことだった。ああ、しかしそれは何という大きい衝動を僕にあたえたことだったろう。話し声の一人は柿丘秋郎にちがいはなかったけれど、もう一人の話し相手は呉子さんではなく、なんとそれは白石博士夫人雪子女史だったではないか。

勝手を知った僕は、逸いちはや早く身を翻ひるがえして、書齋のカーテンの蔭にかくれることに成功した。そこからは隣りのベッド・ルームの対話が、耳を蔽おほいたいほど鮮あざやかに、きこえてくるのだった。

そこに聴くことのできた話の内容は、一向に二人の関係について予備知識をもたなかつ

た僕を、驚愕の淵につきおとすに十分だった。読者は、次のくだりを読んで、僕の呆然たりし顔を想像していただきたい。

「貴女はどうしても、僕の希望に応じて呉れないのですか」

「いやなことですわ、ひどい方」

「こんな僕が、へいつくばってお願いをするのに、それに応じてはくたさらないのですか」

「あたしは、どうあつてもいやなんです」

「ほんの僅かな時間でよいのですから、この上に寝て下さい」

「いくらなんでも、貴下の前に、そんなあられもない恰好をするのは、いやですわ」

「お医者さまの前へ行つたのだと思つて我慢して下さい」

「お医者さまと、貴下とでは、たいへん違いますわ」

「なんの恥かしいものですか、僕が——」

なにやら、せり合うような気配。

「暴力に訴えなされるのですか（とキリリとした雪子夫人の声音、だが語尾は次第に柔かに

かわる) まア男らしくもない」

「でも今を置いては、機会は容易に来ないのですから」

「あたしは、貴下の御希望に添う気持は、一生ありません。貴下も神に仕える身でありながら、まだ生れないにしても、一つの生霊を自ら手を下して暗闇から暗闇にやっしてしまうなんて、残酷な方！ ああ、人殺し……」

「大きい声をしないで下さい。どうしてこれだけ僕が説明をするのに判ってくれないんです。貴女が僕の胤を宿したということが判ったなら、僕は一体どうなると思うのです。社会的地位も名声も、灰のように飛んでしまいます。そうなると貴女と違って、今までのように贅沢な逢う瀬を楽しむことが出来なくなるじゃありませんか。僕の病気が再発しても、最早博士は救って下さいません。それを考えて、僕は愛していて下さるのだったら、僕の言うことを聞きいれて、この簡単な墮胎手術をうけて下さい」

「何度おっしゃつても無駄よ、あたしはもう決心しているのよ。あたしがお胎にもつてい  
る可愛い坊やを、大事に育てるんです」

「ああ、それでは、博士を偽って、博士の子として育てようというのですか」

「まア、どうしてそんなことが……。右策とあたしとの間に子供が無かったのは、右策自

身が子胤こたねをもちあわさないのでからおこったことなんです。右策は、それを学者ですからよく知っているのです。だから、あたしが今、妊娠したとしたら、その場であたしの素行そこうを悟さとつてしまいます」

「だが、僕の子だかどうか判らないとも云える……」

「莫迦ばかなことをおっしゃいますな。生れてきた胎児たいていの血液型を検査すれば、それが誰たねのであるか位は、何の苦もなく判つてよ、それに貴方あなたは右策うさくとは切つても切れない患者たねと主治医ゆじいじゃありませんこと。あなたの血液型なんかその喀痰かくたんからして、もう夙とつくの昔に判つていることでしょうよ」

「ああ、それでは貴女はこれからどうしようというのです。この僕をどんな目に遭あわせようとするのです」

「あたしは、貴方との間にできた坊やを、大事に育てたいんです。あたしは、もうすっかり決心しているのよ。右策うさくがこのことに気付いたときは、出て行けというなら出て行くし刑務所へ送りこんでやろうというなら送りこまれもする。しかしいつか、あたしは自由の身となって、坊やと二人で貴方があたしのところへ帰ってくるのを待つんです」

「ウン判つた。さては生れる子供を証拠にして、僕の財産をすっかり捲きあげようという



のだな。金ならやらぬこともない。だが、交換条件だ、その胎児を××しまつて下さい」

「ほほほ、そううまくは行きませんことよ。お金よりも欲しいのは貴方です。この子供が  
 生きている間は、貴方はあたしの懐ふところから脱けだすことができないうですわ。あたしは、あ  
 なたの地位を傷きずけなくてすむもつとよい方法も知っていますのよ。だけど、どうあつても  
 貴方を離しませんわ。貴方はあたしの思うままに、なっていないなければならないんですわ。  
 背そむけば、貴方の地位も名声もたちまち地に墜おちてしまいますよ。あたしがしようと思えば、  
 ね。だがそれまでは、貴方は無事に生きてゆかれるのよ。貴方の生命は、一から十まで、  
 みんなあたしの掌ての中うちに握つかられてしまつてるのよ、今になってそれに気のついた貴方はど  
 うかしてやしない……」

「……」

「アツ、貴方は短銃ピストルを握つかっているわね。あたしを殺そうというのでしょうか。ええ判つて  
 いるわ。でもお気の毒さまですわね。あたしを殺したら、その翌日と言わず、貴方は刑務  
 所ゆきよ。貴方はあたしが殺されたときのことを準備していないようなぼんやり者だと思  
 っているの？ あたしが死ぬと同時に、一切が曝露ばくろするという書類と証拠が、或る所に保  
 管されているの知らないのねえ」

「ああ、僕は<sup>おおほかも</sup>大莫迦者だつた」

<sup>おえつ</sup>嗚咽する柿丘の声と、<sup>みだ</sup>淫らがましい<sup>あいぶ</sup>愛撫の言葉をもつて<sup>なぐさ</sup>慰めはじめた雪子夫人の<sup>えんご</sup>艶語とを<sup>そ</sup>其の<sup>ま</sup>儘、あとに残して、僕はその場をソツと滑るように逃げだすと、<sup>はだし</sup>跣足で往来へ飛びだしたのだつた。

## 3

その後、柿丘秋郎と、白石博士夫人雪子とは、すくなくとも外見的には、大変平和そうに見えた。室内にレコードを掛けて、柿丘と雪子とが相抱いて踊りはじめると、<sup>あからがお</sup>赭顔の博士は、柿丘夫人呉子さんを<sup>たす</sup>援けておこして、<sup>あざや</sup>鮮かなステップを踏むのだつた。

秋という声が、どこからともなく聞こえてくると、急に誰もが緊張した顔付をするのだつた。柿丘秋郎は、かつての日の雪子夫人の<sup>きようはく</sup>恐迫に<sup>ふる</sup>震えあがったのを忘れたかのよう<sup>たびごと</sup>に、事業や講演に熱中した。だが、その<sup>たびごと</sup>度毎に、雪子女史の姿が影のようにつきまどつ

ていたのは、寧ろ悲惨であると云いたかった。

柿丘秋郎が、自邸の空地の一隅に、妙な形の掘立小屋を建てはじめたのは、例の密会事件があつてから、三十日あまり過ぎたのちのことだった。その掘立小屋は、窓がたいへん少くて、しかもそれが二メートルも上の方に監房の空気ぬきよろしくの形に、申わけばかりに明いていた。小屋が大体、形をととのえると、こんどは電燈会社の工夫が入つてきて、大きい電柱を立てて、太い電線をひっぱたり、いかめしい碍子をじこんだりしたすえに、真黒で四角の変圧器まで取付けていった。それがすむと、厚ぼつたいフェルトや石綿や、コルクの板が搬び入れられ、それはこの小屋の内部の壁といわず、天井といわず、床といわず、入口の扉といわず、六つの平面をすっかり三重張りにしてしまった。室内へ入ると、まるで紡績工場の倉庫の中に入ったような、妙に黴くさい咽するような臭気がするのだった。だがその割合に呼吸ぐるしくないのは、電気装置が働いて、室内の空気が、外気と巧みに置換せられているせいだったかも知れない。三重壁体も完成すると、機械台がいく台も担ぎこまれ、そのあとから、一台のトラックが、丁寧な保護枠をかけた器械類を満載して到着した。若い技師らしい一人が、職工を指揮して三日ばかりで、それ等の器械類をとりつけると、折から、講演先から帰ってきた柿丘秋郎に、委細の説明を

したあとで、挨拶をして引上げて行つた。

一体これから此の部屋で、何が始まろうというのだ。

柿丘が呉子さんに説明したところによると、今回協会の奨励金を貰つて、旅順大学の東京派遣研究班が、主として音響学について研究するということに決定つたそうである。それには実験室を建てねばならないが、適当な地所が見付からないために、これも社会奉仕の一助として、柿丘は自分の邸内の一部を貸しあたえることにしたそうである。かたがた、柿丘自身も、かねてから、科学というものに大きい憧れを持っていたこととて、これを機会に、初等科的な実験から習いはじめるといふ話だつた。

呉子さんは、柿丘の言葉に、これッばかりの疑惑もさしはさまなかつた。一日のほとんど大部分の時間を、家庭の外で暮す主人を、実験室とはいえ自邸の隅にとどめることの出来るのは何となく気強いことだつたし、食事についても、何くれとなく情の籠つた料理などをすすめることが出来ることを考えて、大変嬉しく思ったほどだつた。

しかし、ありようを言えば、これは柿丘秋郎の奇怪きわまる陰謀にもとづく実験が、聴て開始されようとするのに外ならなかつた。さて其の実験というのは、――

さきに、雪子夫人から威嚇されて、墮胎手術をはねつけられた柿丘秋郎は、その後、こ

のことを思いとどまったかのように見せていたが、内心は全く反対で、あの時、夫人の深し情じょうと執しつ拗ような計画とを知ったときに、これはどんな犠牲を払っても、墮胎を実行しなければならぬと思つた。その方法も、夫人の生命をおびやかすものであつてもならないし、しかも夫人が全く氣のつかぬ方法でない駄目である。それは、たいへんに困難な方法だ。いや一体、そのような方法があるものか無いものか、それが案ぜられもした。しかし自らの智恵ぶくろの大きいことに信念をもつ柿丘は、なにかしら屹きつと度、素晴らしい手段がみつかるだろうと考へた。

彼は、或る時は図書館に立たて籠こもつて、沢山の書籍の中をあさり、また或る時はそれとなく医学者の講演会や、座談の席上に聞き耳をたてて、その方法を模索もさくしたのでつた。夫人を美酒びしゆに酔よわせるか、鴉片あへんをつめた水管の味に正体を失わせるか、それとも夫人の安心をかちえたエクスタシーの直後の陶酔とうすい境きやうに乗じやうじて、墮胎手術を加えようか、などと考へたけれど夫人はいつも神経過敏で、容易に前後不覚ぜんごふかくに陥おちいりなかつたので、手術を加えても、その途中の疼痛とうつうは、それと忽たちまち氣がつくことだろうと予測された。一度夫人に、手術を加えたことを嗅かぎつけられたが最後、すべては地獄へ急行するにきまつていたことだつた。なんとかして、雪子夫人が、全く氣のつかないうちに、それは手術であるとも、彼の持つ

た毒物であるとも感付かないように、極めて自然にことをはこばなければならぬのだつた。それは、いかに叡智えいちにたけた彼にとつても、容易なことで解決できる謎ではなかつた。だが幸運なる彼は、とうとう非常にうまい方法を知ることができた。

それは、物体の振動を利用する方法だつた。いまドロップスの入っていた空き缶あかんの蓋を払いのけて底に小さな孔あなをあけ、そこに糸をさし入れて缶を逆さに釣り、鉛筆の軸じくかなにかでコーンと一つ叩いてみるがいい。そうするとこの缶は形の割合には大きい音をたてて、グワーンと、やや暫しばりくは鳴り響いているだろう。強く叩けば更に大きい音響を発する。しかしその音おん色しよくは、いつも同じものである。それというのが、こうした箱や壺つぼめいたものには、その寸法からきまるところの振動数というのがタツタ一つきりあるので、一体振動数というのは音色そのものに外ならないものだから、それで同じ器うつわを叩けば、音の大小はあつても、音色はいつも同じなのである。

そこで、もう一つのドロップの空き缶あかんをとりあげて、前と同じように、糸でとめて、ぶら下げて置く、その上で、最初の缶を思いきり強く叩くのである。するとたちまち大きい音がするであろうが、音がした上で、手でもつてその缶を握って振動を止めるのである。そのとき耳を澄ませて聴くならばいま叩いた缶は手でおさえて振動をとどめたにも拘かかわらず、

それと同じような音色ねいろの音が、かなり強くきこえるではないか。はて、その音は、何処で鳴っているのだろうか。

よく気をつけてみるなれば、あとから糸をつけて釣つりした叩たたきもしないドロップの缶かが、自然にグワーンと鳴っているのである。これを共鳴きやうめいげんしやう現象げんしやうというが、二つある振動体が同じ振動数をもっているときには、一方を叩くと振動が空中をつたわって他のものを刺戟せきすることとなる。その刺戟がもともと同じ性質の刺戟だもんで、棒で叩かれたと同じ効果きめをうけ、そいつも鳴り出すのだ。ちよつと考えると、それは一方が鳴ると、それについて自然に応こたえるかのように鳴り始めるようにみえるのだ。若もし、別にそつと釣して置いた振動体が寸法のちがうものであつては効果ききめがない。例えば大きい缶詰あの空いたものなんかでは駄目である。つまり振動数が同じでないものでは駄目である。

あとは釣つりした缶かに、飯粒めしつぶかなんかを、ちよつと付着させた上で、もう一度始めに釣つりした缶をグワーンと、ひっぱたいてみると、あとから釣つりした缶がたちまち振動して鳴り出すのは勿論のことであるが、見て居ると、缶かの壁かがあまりに強く振動するものだから、其のうちにとつと、密着みせきしていた飯粒めしつぶが剥はがれてポロリと下に落ちてくるのである。――こいつを使って墮胎だたいをやらせようというのが、柿丘秋郎の魂胆こんたんだった。

子宮は茄子の形をした中空の器である。そう考えると、子宮にもその寸法に応じた或る振動数がある筈だ。妊娠後二ヶ月や三月や四月の胎児は、ドロップの缶に付着した飯粒も同然で、ほんの僅かの力でもって子宮壁に付着しているのだった。注射器を使って子宮の中に剝離剤を注入すれば、その薬品が皮膚を蝕すため、胎児と子宮壁とをつないでいる部分の軟い皮が腐蝕して脱落し、墮胎の目的を達するのだった。それを機械的にやるのが、柿丘秋郎のとうとうという方法であつて、雪子夫人の外部から、強烈な特定振動をもった音を送つてやると子宮はたちまち激しい振動をおこし、揚句の果に彼と夫人との間にできた胎児が、ポロツと子宮壁から剥れおちて外部へ流れ出し、完全に墮胎の目的を達しようというのだった。

この世にも奇抜な惨忍きわまる方法を見つけだした柿丘秋郎は室内を跳ねまわつて歓喜したことだった。彼は二万円近くの金を犠牲にし、旅順大学の研究班をダシにつかつて、その邸内の一隅に、実験室外には音響の洩れないという防音室を建て、多くの備付器械のうちに、予め、子宮の寸法から振動数をきめて、そのような都合のよい音を出す器械を混ぜて購入したのだった。その機械の据付も終つた。器械は、彼が操るのに便利なように、一切の複雑な仕掛けを排し、押釦一つをグツと押せば、それで例の恐ろしい



振動が出るように作らせることを忘れなかった。もつともこの器械を作った人は、魔人のような彼の使用目的をすこしも知らなかったのだった。

さてこの上は、何とか言葉をかけて、雪子夫人をこの実験室に引き入れることができればよいのだった。それはなんの造作ぞうさくもないことだった。彼が唯一言、夫人にむかって、

「奥さん、例の旅順大学に使わせる実験室がすっかり出来上って、今日の夕方までには、机も器械も全部とりつけが出来るんですよ」とさえ云えばよかった。あとは夫人の方で心得て、

「あら、そお。それじゃ、あたし夜分やぶんに、ちよつと、お寄りするわ。ね、いいでしょう、あなた」

と云うに違いないのだった。そして事實はすべてその筋書どおりに、とりはこばれたのだった。時計が七時をうつと、実験室の扉ドアがコトコトと打ち鳴らされた。室内にひとりで待ちかまえていた柿丘は、その音を聞くと、ニヤリと薄気味の悪い嗤わらいをうかべて、やら、椅子の上から立ちあがった。

内部から柿丘が扉ドアを開くと、とびつくようにしてよろめきながら、雪子夫人が入ってきた。

「貴女お独り？」

と、柿丘はきいた、念のために……。

「ええ独りなのよ。どうしてさ、ああ、奥さんのことなの。奥さんなら、いまちよいとお仕事が、おあんなさるのですって」

雪子夫人は、お饒しゃべり舌をしたあとで、娼婦しょうふのように、いやらしいウインクを見せたのだった。

「奥さん、今夜はどうかenasುತ್ತたんですか、お顔の色が、すこし良くないようですね」

「あら、そお。そんなに悪い？」

「なんともないんですか」

「そう云われると、今朝起きたときから、頭がピリピリ痛いようでしたわ。きつと、芯しんが疲れきっているのねえ」

「用心しないといけませんよ。今夜はなる可べく早くおかえりになっておやすみなさい」

「ええ、ありがとう、秋郎さん」

そう云って、夫人はそつと額に手をやった。夫人は、巧みにも柿丘の陰謀から出た暗示かかに罹かかってしまったのだった。

それから柿丘は、室内をひと巡り夫人を案内して廻った。最後に二人が並んで立つたのは、例の奇怪なる振動を出すという音響器の前だった。柿丘は出鱈目の実験目的を説明したうえで、右手を押し鉦の前に、左手を、振動を僅かの範囲に変えることの出来る装置の把手に懸けた。これは、万一計算が多少の間違いをもっていたときにも、この把手をまわすことによつて振動数を変え、例の恐ろしい目的を果そうという仕組みだった。

「じゃ、ちよつと、その音響を出してみますよ。たいへん奇妙な調子の音ですが、よく耳を澄ましてきいてみると、なにかこう、牧歌的な素朴な音色があるのです」

柿丘秋郎は、捉えた鼠を黽つてよろこぶ猫のような快味を覚えながら、着々とその奇怪な実験の順序を追つていったことだった。

「まあいいのねえ、早くやつて頂戴な」

と恐ろしい呪いの爪が、おのれの身の上に降るとも知らない様子で、雪子女史は実験を待ち侘るのだった。

「では始めますよ。ほーら、こんな具合なんです……」

柿丘は右手の指尖でもつて、押鉦をグツとおしこんだ。忽ち鈍いウーンという幅の広い響きが室内に起つたが、その音は大変力の無い音のようで居て、その癖に、永く聴い

ているとなにかこう腹の中に爬虫類の動物が居て、そいつがムクムクと動き出し内蔵を鋭い牙でもって内側からチクチクと喰いつくような感じがして、流石に柿丘も不愉快になった。だが手軽くこの音響をやめては、折角の墮胎作用も十分な効目を奏さないことだろうと思つて、我慢に我慢をして押釦から指尖を離さなかつた。

「なんだか、やけに地味な音なのねえ」

「どうです、この牧歌的な音色は……」

「牧歌的なもんですか、地面の下でもぐらが蠢いているような音じやありませんか」

そう云うと、夫人はこの実験台の前から、スツと向うへ歩みはじめた。柿丘はホツとして押釦から指尖を離した。

夫人は真直に歩いて片隅へまで行つたが、やがてそのまま柿丘の方へ帰つてきた。

「ねえ、このお部屋に、御不浄はないのですか？」

夫人は顔をすこしばかり顰め、片手を曲げて下ツ腹をグツと抑えるようにしていた。その言葉を聞いた柿丘は、頭がグラグラとするのを覚えて、思わず、指尖にあたった実験台の角をギュツと握りしめたのだった。そして、言葉も頓に発し得ないで、反対の側の片隅を、無言の裡に指した。そこには黒い横長の木札の上に、トイレットという文字が白エナ

メルで書きしるされてあつた。

雪子夫人は、吸いつけられるように、その便所の扉ドアの方に歩みよつた。

柿丘は、化物のような大おお口くちを開いて、五本の手の指をグツと齒と齒の間にさし入れると、笑いとも泣いているとも分つことの出来ないような複雑な表情をして、ワナワナとその場にうち震ふるえていた。

バタンと、荒つぽく便所の扉のしまる音がして、雪子夫人がヨロヨロと立ち現れた。その面かお色いろは蒼白そうはくで、唇は紫色だつた。ひよいと見ると夫人は右手に何かをぶら下げているのだつた。

「秋郎さん」夫人の空うつろ虚な声が呼びかけた。

「……」

「あなたの祈りは、とうとう聞きいれられたのよ。あたしたちの可愛い坊やは——ホラあなたにも会わせたいわ」

ピシヤリと、柿丘の頬なに、生なまぬるいものが当たると、耳のうしろを掠かすめて、手ハンカチ帛カチらしい一掴つかみほどのものがパツと翻ひるがえつて落ちた。

「吁あツ——」と声をあげて、柿丘は頬つぺたを平手で拭ぬぐつたが、反射的に、その生なまぬる

いものの付着した掌を、グツと顔の前にさしだした。うわッ、血だ、血、血、ぬらぬらとした真紅な血塊だった。

柿丘はその場に崩れるように膝を折って倒れると、意識を失ってしまった。

どの位、時間が経ったのか。彼が再び気がついたときには室内に白石夫人の姿は最早見えなかった。

(兎に角、うまく行つた。真逆、なにがなんでも、音響振動で夫人に墮胎をさせたとは、気がつくまい。胎児さえ流れてしまえば、もうこちらのものだ。おい柿丘、お前の勝利だぞ。一つ大きい声で愉快に笑え！)

そう自分の心を激励したものの、声を出そうとしても、胸が抑えつけられるようで、思うようにはならなかった。気がつくつと、咽喉の下あたりと思われるあたりに、何か南瓜のようなものが問えるようで、気持がわるかった。そいつを吐こうと思つて、顎をグツと前に伸ばす途端に、咽喉の奥が急にむずがゆくなつてエヘンと咳いたらば、ドツと温いものが膝頭の前にとび出してきた。

「こいつは、失敗つた！」

柿丘秋郎には、普通の眼には見えない胸の奥底がハッキリ見えた。そのうちにも、あ

とからあとへと激しい咳せきに襲われそのたびにドツドツと、鮮血せんけつを吐き散らした。柿丘の前の血溜りちたまは、見る見るうちに二倍になり三倍になりして拵ひろまって行つた。それとともに、なんとも云えない忌いやな、だるい気持に襲われてきた。すると、全身がガタガタと震えだして、いくら腕を抑おさえつけても、已やむということなく、終ついには、実験室全体が大地震おおじしんになつたかのように、グラグラ振動をはじめたと錯覚さつかくをおこした。灼やけつくような高熱が、全身から噴ふきだした。

「奔馬性結核ほんませいけつかく！」

彼は床の上に転倒しながら、ハッキリ彼自身の急変を云いあてたのだった。

## 4

吾が柿丘秋郎は、なんとという不運な男であつたことだろう！

折角せつかく苦心に苦心を重ねた牝豚夫人の墮胎術には成功したのだったが、その夜彼は突如

として大啗血だいかつけつに襲われ、急に四十度を超える高熱にとりつかれて床についてしまった。彼の意識は、もうかなり朦朧もうろうとしてしまったが、吸入の酸素瓦斯さんそガスを、もっと強く出してくるようにといいことと、どんなことがあつても主治医である白石博士を呼んではならないということとを、家人に要求したのであった。何故に名医白石博士を謝絶したのであるか。生命をかけてまで、排撃はいげきしたのであるか。

それについて、柿丘は遂に言葉をつぎたすことなく、二日後に長逝ちようせいしてしまった。ここに涙なみだなくしては眺めることの出来ないものがある。それは、二十年の春を、つい此の間迎えたばかりの呉子さんが、早や墨染すみぞめの未亡人という形式に葬ほうむられて、来る日来る夜を、寂滅じやくめつと長恨ちようこんとに、止め度もない涙なみだを絞しぼらねばならなかったことだった。

身寄りのすくない呉子さんに、何くれとなく力添ちからぞえをすることの出来るのは、僕一人だった。白石博士も、雪子夫人も急によそよそしくなつて、極ごくく稀まれにしか、呉子さんの許を訪ねて来はしなかった。僕は、亡き友人柿丘になり代つて、いや柿丘のなし得たその幾層倍の忠実さをもつて、呉子さんを慰なぐさめたのだつた。呉子さんも、僕を亡き良人おつとの兄弟同様の人物として、何事につけ僕を頼り、たとえば遺産相続のことまでも、すこしも秘密にすることなく、僕に相談をかけるという有様だった。呉子さんと僕との心が、いつとは無



しに相寄あいよつて行つたのは、誰にも背きいて貰もらえることだろうと思う。

柿丘の死後二ヶ月経つた晩ばん秋しゅうの或る朝、僕はその日を限つて、呉子さんの口から、或る喜ばしい誓約をうけることになつてゐるのを思い浮かべながら、新調の三つ揃いの背広えんがわを縁えんがわ側にもち出し、早くこれに手をおして、午後といわず、直ちに唯今から、呉子さんを麻布あさぶの自邸に訪問しようと考えた。

僕は、帯をほだいて衣服をうしろにかなぐり捨てると、猿さる股また一枚になつて、うららかな太陽の光のあたる縁側にとび出し、ほの温い輻射熱ふくしゃねつを背中一杯にうけて、ウーンと深い呼吸をして、瞼まぶたをとじた。

「町田狂太さん」

不意に、庭の方から人の近づく気配がした。眼を眩まぶしく開くと、三十あまりの若い青年紳士が、こちらを向いてニコヤカに笑いながら、吾が名を呼びかけた。

「僕は町田ですけど、貴方あなたは、どなたでしたかね」

僕も、ついつい笑いに誘さそわれて、朗ほがらかに云つてのけた。

「ちよいとお話を伺うかがいたいことがあるんですが……。僕は、こういう者なんです」

そう云つて青年紳士は、一葉いちようの名刺をさしだした。とりあげて読んでみると、

「私立探偵 帆村莊六」  
ほむらそうろく

こんな名刺なんか、破いて捨てちまえだと思った。しかしそんなことは色にも出さず僕は云った。

「どんな御用か存じませんが、まあお掛けなさい。一寸着物を着ますから……」

そう云って僕は、着物のある奥座敷の方へ、とび込もうとすると、

「いや、動くよ、一発。横ッ腹へ、お見舞い申しますぞ」青年は、おちついて云った。

ふりかえってみると、青年紳士の右手にはキラリと、ブローニングが光っているのだ。た。

僕は、裸のまま、新調の洋服をソツと傍へのけると、縁側に腰を下ろした。

「もう、お覚悟はついたことでしょうが、柿丘秋郎殺害犯人として、貴方を捕縛します。

令状は、ここにちゃんとあります」

帆村と名乗る私立探偵は、白い紙きれを、僕の方に押しやった。

「莫迦なことを云つちやいかん」

と、僕は云った。

「柿丘は僕の親友でもあり、兄弟同様の仲なんだ。怪しい人物は、彼をめぐる女性たちそ

れから藪医者やぶいしやなんか、沢山あるじやないか」

「そんなことは、貴方のお指図さしずをうけません。知りたければ云ったげますが、僕は柿丘夫人から依頼をうけて、もう一と月あまり、あらゆる捜査をやってきたんです。この期ごに及んで、そうじたばたすることは、貴方の虚名きよめいを汚けがすばかりですよ。神妙しんめうになさい。

貴方は、音響振動によつて、婦人の墮胎だたいをはかったり、結核患者の病巣びようそうにある空洞くうどを、音響振動を使つて、見事に破壊し、結核病を再発させるばかりか、その一命くわうどを断たとうという恐ろしい企てくわだをした人なんです。しかも、柿丘氏には、すこしもそんな話をせず、夫人を墮胎だたいさせることばかりに注意力を向け、おのれの空洞くうどうが激しい振動をおこして、結締織けつたいしきを破壊させ、自分の生命を断つてしまうなどということを一向に注意してやらなかつたのです。無論、すべては、物理教師だった貴方の悪知恵だったのです。貴方はそのことを、巧みに隠していましたね。

貴方は、柿丘氏死亡の責任を、主治医の白石博士に向けるように故意にさまざまの策動をしたり、博士夫人が痴情ちじょう関係から加害でもしたかのように仕むけました。

だが、すべては私達商売人にとつて、あまりに幼稚なお膳立てでした。

それに貴方は、一つの重要な失策をしている。貴方は、細心さいしんの注意を払つたにも係かかわら

ず、柿丘氏の日記帳を処分することを忘れていた。或いは、貴方はこの日記帳を読んだことはあるのだが、柿丘氏が、あのことについては、ほんのちよっぴりも日記帳に記述をさけているのを見て、すっかり安心されたのかも知れませんか。

だが、この私は、重大な一行を見<sup>みの</sup>遁<sup>のが</sup>しはしなかった。それは、柿丘氏が今年の秋の始めに、日×生命の保険医の宅で、正面からと側面からの、二枚のレントゲン写真を撮ったという記事だったのです。

レントゲン写真は、正面又は背面から撮影するものであって、けっして側面からうつすようなものじゃない。そこを私は、不審に思ったのです。それから私は、日×生命の保険医を訪ねて、いろいろと絞った揚句<sup>あげく</sup>、貴方があの保険会社の外交員と、保険医とをうまく買収して、あの奇抜なレントゲン写真をとらせ、その種板を持ってゆかれたことを知りましてねえ、町田狂太さん、貴方は、正面と横とから、柿丘氏の右胸部にある大きい空洞<sup>くうどう</sup>の体積を、精<sup>くわ</sup>しく計算なすったのでしたね。その結果、なんと皮肉なことにも、柿丘氏の結核空洞は、白石博士夫人の子宮腔<sup>しきゆうかう</sup>の大きさと、ほぼ等しい大きさをなして居ることを発見したのです。

一石にして二鳥、なんにも知らぬ柿丘氏の手を借りて、その人を自滅させると同時に、

その美しい呉子夫人を己が手に収めようとした貴方だったのです。敏感なる夫人は、健気にも、みずから進んで貴方の懐中に飛びこみ、或る程度の確信を得られると、早速私に真相を探求してもらいたいという御依頼があつたのです。

さて、貴方の買取された保険外交員と保険医とは、私と一緒にについて、この垣の向うに控えて居ります。もし久濶を叙したいお思召しがあるなら、早速御ひき合わせしようと思ひますが、如何でしょうか。

その間に私は家宅捜査をさせて頂いて、振動魔の貴方が、計算せられた紙ぎれや、また柿丘氏には不合格になつたと思わせた生命保険に、貴方が莫大な保険金を契約して、柿丘氏を殺したあとで巨額の死亡支払金を詐取したその証拠書類やらを発見させて頂きたいんです。なにか、私に仰有ることはありませんか

その青年探偵帆村莊六と名乗る男は、痛快に僕の正体を発いてしまったのだった。

それから、満二ケ年の歳月が流れて、公判のあとに公判が追いかけて、遂に先頃、大審院の判決もすんで、ここに一切の訟訴手続きが閉鎖されることになつた。それから僕は、この拙い懺悔録を書き綴りはじめたのだったが、不思議なことに、どうやらやつと書き終えた今夜は、僕が味わうことの出来る最後の夜らしい。そのことは前日から感付いてい

たので、別に臆<sup>おく</sup>もしない。

この思い出ふかい夜が静かに明けはなれると共に、この監房を立ちいでて、高い絞首台にのぼらねばならないのである。

# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第二卷 遺言状放送」三一書房

1990（平成2）年10月15日第一版第一刷発行

初出：「新青年」博文館

1931（昭和6）年11月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：t a k u

校正：土屋隆

2007年8月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 振動魔

海野十三

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>